

- KENNEL, J. (1910). Die Palaearktischen Tortriciden, p. 122.
 MEYRICK, E. (1914). Genera Insectorum, Lep. Het. Tort., p. 18.
 FLETCHER, B. (1920). Life-Histories of Tortricidae, Mem. Dep. Agr. India, p. 35.
 ISSIKI S. (1922). Catalogue of Japanese Tortricina, Zool. Mag., Vol. 34, p. 283.
 TAKAHASHI S. (1930). 果樹害虫各論, 上巻
 KONDO T., MIYAHARA H. (1934). 害虫に関する試験並研究第1報
 DIAKONOFF, A. (1941). New Asiatic and Papuan Tortricidae with Records of other species, Treubia Deel 18, Afl. I, p. 33-37.
 ISSIKI S. (1950). Iconographia Insectorum Japonicorum, p. 495.
 DIAKONOFF, A. (1951). Entomological results from the Swedish expedition 1934 to Burma and British India, (Lepi.) Arkiv Zool. (3), nr. 6, p. 63.
 BRADLEY, J. A. (1952). Adoxophyes orana (F. R. 1834) (Lep.: Tort.), Entomologist, Vol. 85, p. 1-4.
 GROVES, R. (1952). A Preliminary Account of the Summer fruit Tortricidae, Adoxophyes (F. R.) in Great Britain, Rep. E. Malling Res. Sta. 1951, p. 152-154.
 YUASA K., KAWATA K. (1952). 農作害虫新説
 HARDMAN, J. A. (1953). The Summer Fruit Tortrix Moth, Adoxophyes orana (F.R.), in Britain, Entomologist, Vol. 86, p. 264-272.
 SIRAHI T. (1954). Classification of Insect, p. 349.
 OBRAZTSOV, S. (1954). Die gattungen der palaearktischen Tortricidae, Tijd. Ent., dl. 97, afl. 3, p. 189.

ウスイロヒヨウモンモドキの卵及び若令幼虫に就いて

川 副 昭 人

On the Eggs and the Young Caterpillars of
Melitaea diamina protomedia MÉNÉTRIÈS

By AKITO KAWAZOE

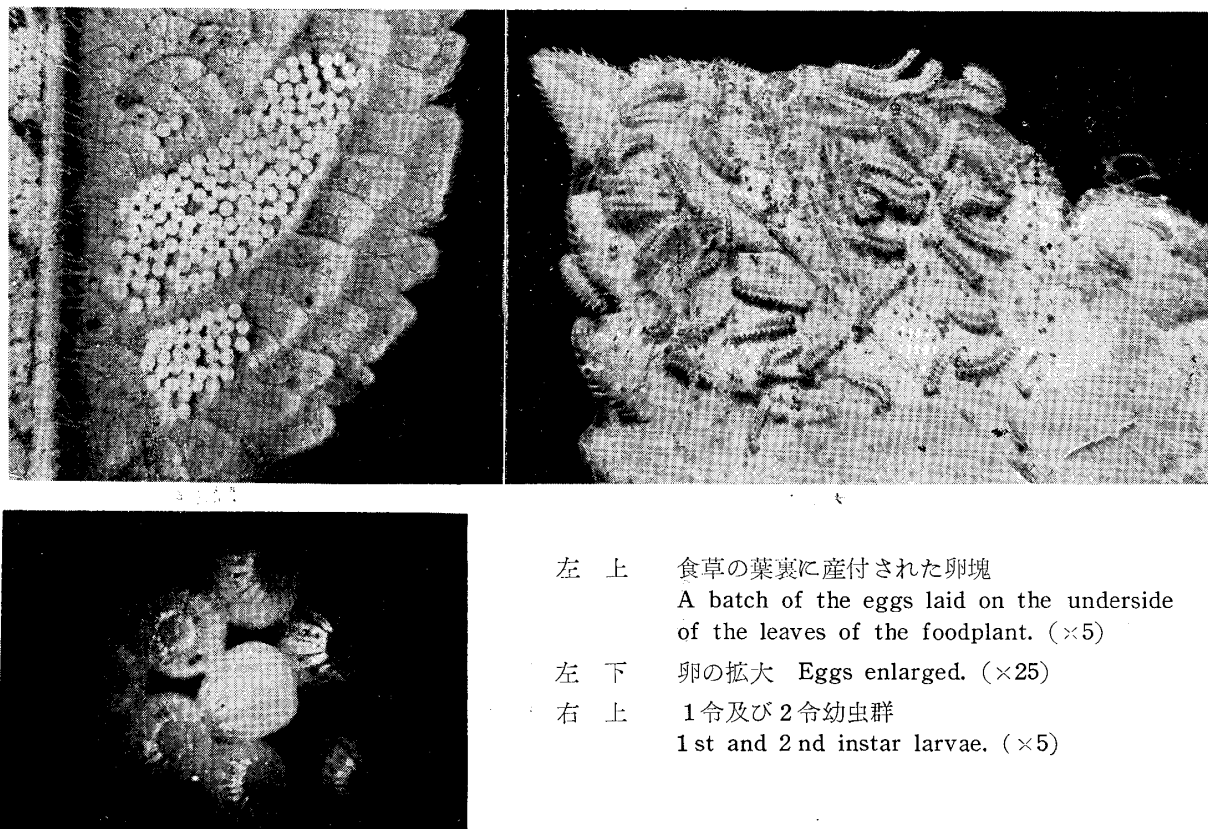
ウスイロヒヨウモンモドキの幼虫に関しては、従来徳山鍊也氏の終令幼虫に関する簡単な記載¹⁾があるのみで、一貫した生活史の記録が見られない。筆者は1953年本種の採卵に成功したが飼育に失敗した。然し食草を知り得たので、1955年再び自宅及び野外で採卵、飼育した。不幸にして此の度も越冬中に全幼虫を死なせてしまったが、本種の若令期に関する知見を得たので、越冬前の生育経過を簡単に述べて、今後の研究の参考に資したい²⁾。

食草：オミナエシ *Patrinia scabiosaefolia*

卵：直径 0.44mm, 高さ 0.51mm. 著しく小型。上面や、凹陥し、側面上部 3 分の 1 に約18条の弱い縦条があり、その下部 3 分の 2 には極めて弱い粗網目状隆起を有する。概形は壺状をなす。

産付直後の卵はや、緑色味を帯びた黄白色。孵化が近づくとも卵内幼虫頭部の単眼周辺が黒化し、次いで大顎が褐色化する。一見して卵は淡褐色を呈するようになる。なお、卵はオミナエシ花梗基部に叢生する若い葉の裏面に数十乃至二百卵位がかためて産付されており、母蝶の産卵にはかなり長時間を要する。産卵期は兵庫県段ヶ峯草原で7月上～中旬、卵期は室内で12～14日、野外³⁾では7月下旬に孵化直後の幼虫群を発見しうる。

幼令幼虫：1令幼虫は体長約 1.5mm, 淡黄褐色で頭部淡褐、単眼部黒色。各節に無色無刺の長毛を叢生する。気門は小さい。前胸背板は大きく横長で、中央後縁はや、前方に向って彎入しており、黄褐色。肛上板ははる



左 上 食草の葉裏に産付された卵塊
A batch of the eggs laid on the underside
of the leaves of the foodplant. (×5)

左 下 卵の拡大 Eggs enlarged. (×25)

右 上 1令及び2令幼虫群
1st and 2nd instar larvae. (×5)

かに小型で濃色である。

2令以降になると、頭部は光沢ある黒色となり、体表刺毛はタテハチヨウ幼虫に共通な有刺円錐状刺毛となる。体色は令を増すにつれて濃色化する。4令時体上面汚鶯色、刺毛は黄色を帯びた黒褐色で基部はリング状に淡く、体下面は全般に黄色、気門線より下位の刺毛も同色である。従って、本令では体側の上下半の境が明瞭である。1～4令幼虫は体は細長であるが、5令になると急に太くなり、体色も黒味の強い茶褐色、同色の刺毛基部は淡黄褐色のリング状をなし、且つ体表に多数の微小淡色斑点を散布する。前胸背板は横長の楕円形で黒褐色。

越冬は5令幼虫で行われる。休眠に入るのは室内で9月上旬より、野外では同中旬である。室内飼育経過の1例を次に示す。脱皮は盛に行うが、幼虫の生育は極めて緩慢で、4令で4～5mm、5令で7mm前後、これが休眠に入る時には5mm位に体を縮小する。

摂食習性：孵化幼虫は脱出後の卵殻を、その基底部を残して食する。その後逐次卵殻位置より離れて卵群

孵 化	第1眠	第2眠	第3眠	第4眠	越冬休眠
12-Ⅶ	19-Ⅶ	24-Ⅶ	28-Ⅶ	1-Ⅷ	8-Ⅷ

周辺の葉肉を食し始める。この際葉の表面に糸を密に吐き、その上を歩行して集団生活をなし、単独に着卵葉から別の葉へ移ることはない。2令以降になると、2～3枚の葉を吐糸で天幕状に連絡して共同の巣を作り、その葉肉を食する。加害葉は細かい葉脈を残して半透明膜状となり、原形を残したまま茶褐色となって枯れる。但し、4令以降になると、葉肉のみならず、葉の側縁部からかじり食し、又は葉面に孔をあけることも多い。糞は抛下されることなく、吐糸上に附着している。野外では一般に幼虫群は葉の裏面に生活しているが、室内飼育では必ずしも裏面とは限らない。普通幼虫群は糸をかけた葉の基部から先端に向かって葉肉を食して行く。

越冬習性：8月上～中旬に、5令幼虫は越冬のための共同の巣を作り、その中で休眠に入る。その際、食いさしの葉を2～3枚、吐糸で袋状に結び合わせ、その中に白く絹糸状に光る台座を作り、その上に一群の全幼虫がかたまって休眠する。この越冬巣の完成には1～3日を要する。

野外でこの越冬巣を見出すことは事実上不可能である。

以上の習性並びに生育経過から、本種の全生活史は、他の *Melitaea* 属 2 種と大差のないものであることが覗われる。

〔註〕

- 1) 徳山鍬也：ウスイロヒヨウモンモドキ幼虫発見，新昆虫 Vol. 8, No. 3 (1955)
- 2) 若令期に関しては次の報告がある。
西村公夫：ウスイロヒヨウモンモドキ〔生態分布〕M.D.K. NEWS 別冊 (1954). 但し，その内容は少くとも若令期に関する限り事実と相違するので，参考文献として採用するのを躊躇したい．恐らく同氏は他の別種の卵及び幼虫を本種と誤認されたのではあるまいか。
- 3) 以下，文中野外とは兵庫県段ヶ峯草原を指す．従って，これより高地又は北地にあつては，生育が若干おくれるものと考えられる．



4 令 幼 虫 の 巣

A web of 4th instar larvae. (×1.2)

Summary

The young stages of *Melitaea diamina protomedia* MÉNÉTRIÈS are similar to the other species' of the same genus, as the following :

Eggs are upright and slightly tapering in shape, with a small depression on the blunt top and a flat base. There are about eighteen longitudinal keels, not reaching half-way up the side; the spaces between the keels are smooth. Down the side, they are covered with a very coarse, slightly raised network. At first they are yellowish-white tinged with green, but as the caterpillar matures within, they become brownish-yellow. They are laid all in a batch, of 40~200, on the underside of the leaves of *Patrimia scabiosaeifolia*, in July.

The caterpillars hatch out about 12~14 days after the eggs are laid, and eat up their own eggshells from which they came a moment ago except the flat bases. Soon they form colonies corresponding to the number of eggs that hatch in any one batch, and then proceed to prepare a dwelling-place conjointly by drawing together with silk two or three leaves of the food-plant, on which they feed until the supply is exhausted. They then immigrate in company to fresh leaves and construct a larger retreat, the better to accommodate their growing bodies. At the fifth instar, towards the mid-August, and while still quite small, they spin a silken home, hibernaculum, with two or three leaves, in which they go into hibernation on the silken carpet for the winter.

The caterpillar in its first instar is brownish-yellow with light brown head, while as it repeats moulting its body with glossy black head gradually becomes dark, except its light brown underside.

ネジロフトクチバを採る

ネジロフトクチバ *Serrodus campana* Guenée は，近頃高尾山（東京）で 1 匹，比叡山（京都）で 2 匹採集されていることは既に緒方氏（あきつ，Ⅳの 3，83

～84頁，1955）によって報告されているが，1956年7月9日，私は大山（鳥取）Alt. 812m にて 1 匹を採集したのでこゝに報告して置く。（西村公夫）